

親野智司等著「小学生の学力はノートで伸びる」すばる舎 2009年5月25日刊を読む

伸びていく子はノートの使い方が違う

1. 落ち着いて授業を受けられる子は理解も早い

(1)書くことが楽しくなれば、子どもは授業でノートを取るのも好きになります。ハードルが低く感じられるのでしょう。どんどん書いていくようになります。

(2)子どもにとって学校生活は、初体験の連続です。

とくに低学年のうちは、授業で緊張している子もいます。先生の指示どおりのことをこなすだけで、大変なエネルギーと集中力を必要とするのです。

(3)でも、書くことに慣れている子は、落ち着いて授業を受けることができます。

勉強のベースができていますから、それは当たり前のことなのです。

それに「ノートと仲良し」ですから、心強いのです。あとは、上手なノートの使い方をちょっとアドバイスしてあげればいいだけです。

(4)小学校時代、勉強とノートは切っても切れない関係にあります。

上手な使い方を身につけることは、子どもの心にゆとりを生み、どんどん吸収力を高めてくれる効果もあるのです。

2. できる子の授業ノートはどうなっている？

(1)ところで、上手な使い方って、何でしょう？

いざ、そう問われてみると、具体的に頭に浮かばないのではないのでしょうか。

そこでまず、次ページの2つのノートを見比べてください。

(2)ここに2つの算数のノートがあります。

(3)一見すると、右のノートはとてもきれいです。字がきれいで、丁寧に書いています。

でも、先生が「6問目の問題を見てごらん」と言ったら、どうでしょう。

6問目を探すのに、1問目から数えなければなりません。これでは、上手な使い方とは言えないわけです。

(4)いっぽう、左のノートは字に力がなく、ふにゃふにゃです。

でも、式の頭が揃っていますし、それぞれの問題に番号が振ってあります。

誰が見てもすぐに「6問目」がどこにあるかわかります。

(5)つまり、ノートの使い方という点ではこちらの方がいいわけです。

3. ノートは「丁寧」がすべてではない

(1)ノートの上手な使い方とは、「丁寧に書くこと」だとお考えの方がたくさんいらっしゃると思います。

(2)たしかに、それも大事です。字が丁寧なノートは読みやすいですし、誰が見ても気持ちがいいものです。

(3)でも、それだけでは十分ではありません。
もっと大事なのは、「構造的に書く」ということです。

(4)なぜなら、ノートを構造的に整理して書くことで、情報を構造的に理解することができるからです。

(5)そして、ノートを構造的に整理して書くとは、言い換えると、情報のつながり方を意識して、どこに何が書いてあるか見やすく書くということです。

(6)もっと詳しく言えば、今どんな勉強をしているのか、何が問題なのか、自分はどう考えるのか、それはなぜか、などということを意識して、書く場所や書き方を考えて書くということです。

(7)たとえば、次のようなことが大切なのです。

単元名や見出しを書く

問題、答え、理由などを、分けて書く

大事なところを線で囲む

問題には番号を書く

縦と横の通りを揃える

間を空けて見やすくする

ダラダラ書かず、箇条書きにする

教科書の単元が変わったら、ノートのページを変える

(8)先ほど、「ノートを構造的に整理して書くことで、情報を構造的に理解することができる」と書きました。

- (9)そして、それは構造的に記憶することでもあります。
- (10)これは、ただ闇雲に記憶するよりも、記憶の定着という点でははるかに勝っています。
- (11)そして、ノートが構造的に書いてあると、「おさらい」がしやすいということもあります。
- (12)それは、どこに何が書いてあるかすぐわかるからです。
- (13)たとえ計算練習のようなノートの使い方としては単純なものでも、番号があるかないかで「おさらい」のしやすさは変わってきます。
- (14)番号を書くのは、構造的に書く上での基本中の基本なのですが、これがあれば「おさらい」も楽になります。
- (15)授業中、先生が「6 問目の問題を見てごらん」と言ったときも、さっとそこを見つけることができるわけです。

4. 「構造的に書く」と勉強が楽になる

- (1)ただ、カン違いしていただきたくないのですが、
「構造的にノートを書けない子は、学力が低い」ということではありません。
- (2)なぜなら、たとえ構造的に書けなくても、学力が高い子はいるからです。
- (3)子どもには個性があります。構造的に書くのが得意な子も苦手な子もいるのです。
たとえ、ノートが構造的に書けていないからといって、勉強ができないわけでは決してないのです。
ここをまず、カン違いしないようにしてください。
- (4)私が本書でお伝えしたいのは、「その逆はありますよ」ということです。
それは、構造的に書く習慣をつけることで、学力が上がるということです。
- (5)構造的に書けるように教えてあげれば、頭の中が構造的になります。
つまり、ものごとを構造的に整理できるようになり、思考力がついていくのです。
そして、知識の定着がよくなります。
- (6)構造的に書くコツを学べば、おさらいしやすいノートを書く習慣がつきます。今より勉強が楽になるのです。
「ここが大事」「ここは例」などと整理したり、授業中に先生が強調したところは赤字にするなど、工夫もできるようになります。

(7) 小学校 6 年間では、いろいろなものを書いて表さなければなりません。

理数系の思考の素地になる表やグラフ。理科の実験の手順をまとめたり、社会では年表を書くこともあります。

(8) ノートの取り方の基本を知っていれば、いろいろな書き方に対応できるだけでなく、効率よく知識を吸収し、自分のものにしていきます。

まさにノートを使って、できる子に育ていけるのです。

(9) その手助けをしてあげるために、本書を読み進めていただきたいと思います。

[コメント]

学力が高いか低いかを決めるのは次の 2 つです。

1 . 読書を確実に積み重ね思慮深さを身に付けること(新聞を読んで考えることも読書に含まれます)

2 . 学び方を学ぶ、(「学ぶ」には、うんなるほどと「理解」すること、十分「理解」したことを身につける、つまり「定着」させること、理解・定着したことを用いてテストでよい点が取れ、また社会で活用することができる、つまり「応用」できることの 3 つが含まれます)スキル・能力が身につけていること。英語で Learning To Learn(ラーニング・トゥ・ラーン「学習の学習」)と訳す人もいます。

「2 番目の学び方を学ぶ」には「ノートの取り方」も入ります。では、どのようにノートを取り活用したらよいのか。

本書は、小学生のノートの作り方、活用法の本としては画期的なものです。わかりやすく、今日からでも実行できます。中学生でも、高校生でも、大学生でも、大学院生でも、社会人でも、いくらでも参考になります。是非お読み下さい。

- 2009 年 7 月 12 日林明夫記 -